◇展示資料　第１展示室ジオラマ「環濠集落模型」および「防御施設模型」について◇

1. ジオラマ「環濠集落模型」および「防御施設模型」について

「環濠集落模型」および「防御施設模型」は、出土された遺構や遺物をもとに、当時の環濠集落や防御施設、武具や戦う人々の様子を想定して再現されたジオラマである。これらのジオラマは、防御を目的に作られた集落全体を概観し、防御の機能も具体的にイメージさせることができる。

環濠集落模型　大塚遺跡［図 1］

大塚遺跡(紀元前 2 世紀～紀元後 3 世紀，神奈川県)は、関東南部で水田稲作がはじまった頃の環濠集落である。ふたつの段階に分かれ、環濠集落模型大塚遺跡［図 1］は、新しい段階の村を復元した模型である（弥生後期 1～3 世紀)。環濠内の面積は、約 22000 ㎡であり、吉野ケ里遺跡の約 15 分の 1 の規模である。(大塚遺跡についての展示室キャプションより引用)

朝日遺跡(弥生中期，紀元前 3 世紀，愛知県)は、尾張地方で見つかった最も大きな弥生時代の集落である。環濠は 3 重で、外側の濠には枝がついたままの木の株(逆茂木)が並べられており、さらにその脇に木の杭が幾重にも斜めに打ち込まれている(乱杭)。(※1)

防御施設模型　朝日遺跡［図 2］

2. 歴史の学習におけるジオラマ活用の留意点と有効性

ジオラマ「環濠集落模型」および「防御施設模型」は、発掘された遺構や遺物を元に、当時の集落と防御施設を想定して作られたものであるが、当時の現実そのままとは言えない。

しかしながら、歴史学習においては、社会科教科書（歴史分野）にも当時の生活の様子をイメージさせるのに有効であることから、当時の生活を想定したイラストは積極的に取り入れられている。そして、それを立体化したジオラマは、絵画資料よりもさらに視覚的にイメージ化しやすい。

したがって、あくまでも一つの想像であるジオラマは、「答え」ではないが、学習の導入段階において有効に活用できる。当ジオラマは、児童、生徒に、弥生時代の環濠集落と防御施設についての学習課題をつかむ手立てとしてご活用いただきたい。

なお、水田稲作民の弥生のむらとして、有名な環濠集落は、農耕社会成立の指標と考えられるが、環濠のないむらの方が圧倒的に多い。環濠集落には、多様な形態があるが、決して固定的な姿でなく、集散を繰り返すのが列島社会の特徴であることも付け加えておきたい。(下線は展示室キャプションより引用)

※1　「遺跡から調べよう!」2 弥生時代，設楽博己著,童心社　ほか参照